

北海道大学 社会科学実験研究センター 2022 年度年次活動報告書(2023 年 7 月)

※センターの沿革などについてはホームページへ移行しました。

<https://lynx.let.hokudai.ac.jp/cerss/>

1. 社会科学実験研究センターとは

(1) センターの理念

- ・社会科学における実験研究のための手法の開発と普及を通して、社会科学の実験科学化を推進する。
- ・社会科学における実験研究の本格的導入により、人間科学と社会科学の双方に対して共通の対話可能な研究環境を提供する。
- ・人間・社会科学における実験研究のための国際実験ネットワークの構築を進め、世界各国の拠点を結ぶ国際実験の促進をめざす。
- ・実験研究を通して人間科学と社会科学とを結びつけるための研究活動を行い、その成果を国際的に発信することのできる若手人材を育成する。

(2) センターの主な役割

- ・社会科学実験の国際拠点として先端的研究を展開し、研究成果を国際発信する。
- ・社会科学実験の中心として、他大学の研究者との協力のもと、若手研究者を育成する(博士研究員・リサーチチャーの受け入れ、ワークショップの開催等)。

(3) 施設概要

北海道大学人文・社会科学総合教育研究棟 6 階に、1) 集団実験室、2) 国際ネットワーク実験室、3) 感覚システム実験室を有している。これらの実験設備は、国際的にも最高水準の社会科学実験施設である。

2. 2022 年度の活動実績の概要

(1) 施設利用

実験室を利用した対面実験の数は、いまだコロナ禍の影響を受けて小規模であったが、当センターの保有する実験参加者プールを用いたオンライン実験が実施され、プロジェクト件数と実験参加者数は回復基調にある。

- ・実験室稼働総日数: 延べ 72 日
- ・実験参加者数: 1,095 名 (21 プロジェクト)

(2) 研究業績

< 人文・社会科学系の兼務教員に限定 >

著書・分担執筆

全 3 件	1 件: 洋書	2 件: 和書
学術論文		
全 27 件	19 件: 国際誌	8 件: 国内誌
学会発表		
全 66 件	47 件: 国際学会	19 件: 国内学会

(詳細は「p. 8～11 研究業績一覧」参照)。

(3) 競争的資金獲得

- ・科学研究費補助金: 40 件、総額 119,335 千円
- ・その他の研究助成: 6 件、15,060 千円

(※分担者に関しては分担額を算入)(詳細は「資料 4 競争的資金獲得状況(p. 6, 7)」参照)

(4) 拠点間連携

連携研究員との活動を通じて、海外の先端研究拠点との連携を引き続き推進している。前センター長の結城は、オックスフォード大学社会的凝集性研究センター所長であり、同大学社会人類学科長でもある Harvey Whitehouse 教授が主導する心理学・人類学・歴史学の融合を通じて人間行動と文化の進化・発展を検討する国際共同研究プロジェクト Seshat に参画している。センター長の大沼進教授は、Asian Journal of Social Psychology の編集委員長をはじめ様々な国際誌の編集委員を務める香港科技大学社会科学部 Kim-Pong Tam 准教授と、環境行動の国際比較調査の共同研究を推進している。

国内の主要拠点との連携も強化している。2021 年度からは、京都大学情報学研究科教授で、人工知能学会の業績賞や功績賞、国際知識情報創造システム学会など国際学会で数々の優秀発表賞を受賞するなど、マルチエージェントシステム分野ではトップランナーの伊藤孝行教授を連携研究員に迎え、JST-CREST などを通じた共同研究を行っている。

(5) 若手研究者の支援とその成果

- ・本センターで研究を行った大学院生の競争的外部資金獲得: 5 件、学術賞: 4 件 (表 1)
- ・日本学術振興会特別研究員: 8 名 (表 2)

表 1 2022 年度に院生および研究員が獲得した学会賞・学術賞・フェローシップ・研究助成

氏名	学会賞・学術賞・フェローシップ
米村朱由	日本人間行動進化学会第 15 回大会若手発表賞
晴木祐助	日本認知科学会第 39 回大会発表賞
海老名美羽	第 86 回日本心理学会学術大会学部生・高校生プレゼンバトル
桂笑花	第 86 回日本心理学会学術大会学部生・高校生プレゼンバトル
相馬ゆめ	公益財団法人旭硝子財団奨学生
Li Li	Travel award for the JANUBET Symposium
Li Li	新学術領域研究「時間生成学」若手女性支援(旅費支援)
舘石和香葉	日本学術振興会若手研究者海外挑戦プログラム(金額:1400 千円)
舘石和香葉	科学技術融合振興財団助成事業補助金助成

表 2 日本学術振興会特別研究員

氏名	資格	受給期間(年度)	研究費(千円)	研究課題名
前田友吾	DC1	2021～2023	700	協力行動の多様性をもたらすもの:関係流動性と自己意識的感情の役割
中田星矢	DC1	2020～2022	1,000	教育による社会の発展をモデル化する—文化進化研究による理論・実証アプローチ—
反田智之	DC1	2021～2023	700	注意の抑制的制御と特性・状態不安のクロストーク
舘石和香葉	DC1	2020～2022	1,000	集団を越えた相互協力関係及び相互信頼関係の構築に関する実証・理論的検討
本間祥吾	DC2	2022～2023	900	不確実な環境における制度と心の共進化:資源分配とリスク回避の理論・実証的検討
水鳥翔伍	DC1	2022～2024	900	協力問題の解決における他者評価の機能と妥当性—理論と実証の相互補完的連携—
晴木祐助	DC1	2022～2024	900	予測符号化理論による内受容感覚の生起メカニズムの理解:非侵襲な方法による実証研究
貴堂雄太	DC1	2022～2024	900	協力及びその文化差の起源を探る—文化的集団淘汰理論に基づく理論・実証的検討—

(6)教育活動

大学院共通授業科目「入門ベジアンモデリング」を開講した。

本学のサマープログラムである Hokkaido Summer Institute 2022 (HSI2022)で招聘された世界第一線の文化心理学者(アルバータ大学心理学部・増田貴彦教授、ウ



図 1 増田教授による大学院生への指導風景

イスコンシン大学グリーンベイ校心理学部・先崎沙和准教授)より、当センターで研究を行っている大学院生が研究指導を受けた。

当センター主催のコロキウム(「CERSS コロキウム」)を 5 件、招待講演とシンポジウムを各 1 件開催した。とりわけ、文化功労賞受賞者でもある山ロー男教授(シカゴ大学社会学部ラルフ・ルイス記念特別教授)が当センターを訪問し、記念講演を行ったことは特記すべきである。

3. 2022 年度の活動の点検・総括

(1)4 つの目標別の点検・評価

①コロナ禍からの社会的な回復の遅れにより、実験参加者が実験室を訪れて実施される対面実験は小規模にとどまった。しかしながら、当センターの保有する実験参加者登録システムを用いて、オンライン実験が大規模に実施され、プロジェクト件数と実験参加者数は 2020、2021 年度からは増加となり、回復基調にある。具体的には、次のように高い活動水準を維持した。

2022 年度に本センターの参加者登録システムや実験設備のインフラを利用した実験は 21 件実施され、総実験室稼働日数は年間延べ 72 日、実験参加者総数は延べ 1,095 名であった。実験参加者総数が延べ 1,000 人以上という規模での実験研究の組織的推進は国内において類例がなく、国際的にも屈指の規模である。

②社会科学実験分野における有為の若手人材の育成

若手人材育成の最も大きな功績は、さがけ研究者の小倉有紀子氏を当センターの特任助教として迎えたことである。小倉氏は、さがけ「[社会変革基盤] 文理融合による人と社会の変革基盤技術の共創」に採択された当初は東京大学の特別研究員であったが、研究に専念するため、実験環境が整っている当センターを志願して移籍した。小倉氏は「共生の条件を探る: 価値観の融和はどこまで可能か?」という研究課題に、実験社会科学と神経科学や情報学の手法とを組み合わせた真に文理融合の研究に取り組んでいる。このような日本の将来を背負う若手研究者を迎え入れられたことは、当センターに魅力的な研究環境が整っており、有為の人材育成の拠点であることを示す揺るぎない証左である。

「若手研究者の支援とその成果」(p.1~2)にも示したように、本センターに活動基盤を置く若手研究者が4件の学術賞を得た。また、日本学術振興会の特別研究員として8名が採用され、特別研究員奨励費8件に加えて5件の競争的外部資金を獲得した。これらに加えて、博士課程在学中の院生が日本学術振興会若手研究者海外挑戦プログラムに採択され、半年間、カナダにおいて研究を行った。進化心理学の第一人者である Pat Barclay 教授との共同研究であり、本拠点の若手研究者が国際的なネットワークを構築しつつあることを示している。これらの成果は、当センターが、自立した研究者の育成に向け、若手が早期から主体的な研究活動を行えるための場を提供してきたことの表れと言える。

ゲストスピーカーを招き CERSS コロキウムを5回実施した。また、Hokkaido Summer Institute 2022として文学研究院が開催した、アルバータ大学心理学部の増田貴彦教授による集中講義「文化心理学の最前線 2022」の開講を支援し、その機会を有効に活かすために大学院生向けの英語論文執筆ワークショップを開催した。

これまで当センターで教育指導を受けた若手研究者は、実験社会科学を担う有為の人材として高く評価され、国内外の大学や研究機関のポジションを獲得してきた。昨年度は、本拠点で教育を受けた大学院生及び出身者が、北海道大学大学院医学研究院及び、文学研究院特任助教、理化学研究所脳神経科学研究センター特別研究員、東京大学国際高等研究所特任研究員に新たなポジションを得た。

以上のように、本センターでは、「社会科学実験分野における有為の若手人材の育成」という所期の目標が着実に達成されている。

③国際的にインパクトのある研究成果の発信

2022年度には、計29本の国際学術論文が掲載もしくは掲載決定し、19件の国際学会発表がなされた。本センター構成員(専任教員・兼務教員及びその指導学生や雇用ポスドク等)による学術論文は、*Nature Communications*、*Scientific Reports*、*PLoS ONE* (総合科学)、*Frontiers in Psychology*、*International Journal of Psychology* (心理学)、*Psychiatry and clinical neurosciences*、*The Journal of Neuroscience* (脳神経科学)など広範な領域にまたがる第一線の国際学術誌に掲載された。また、本センター構成員による論文は、心理学、経済学、経営学、社会学、政治学、法学、人類学、情報科学、進化生物学、動物行動学、社会物理学など、やはり広範な領域の国際学術誌で多数の引用を受けている。例えば Altmetric Score で、センター長の大沼と兼務教員の結城の論文が Top 5%を、兼務教員の河原の論文が Top 10%を維持している。

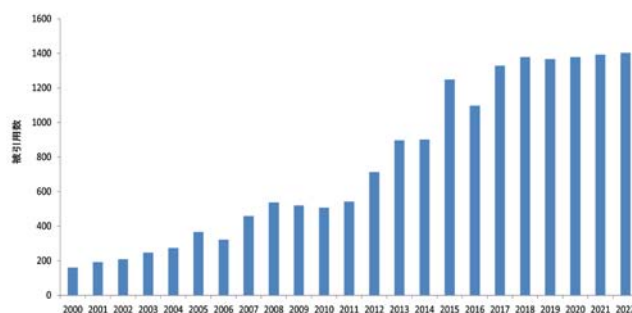


図2 国際学術誌における論文被引用数の推移。

図2は、本センター構成員による論文の国際学術誌における引用回数の推移を示している。本センターが発足した2007年以降、国際業績が着実に増加し、高止まりの状態にあることがわかる(注:本センターには、医歯

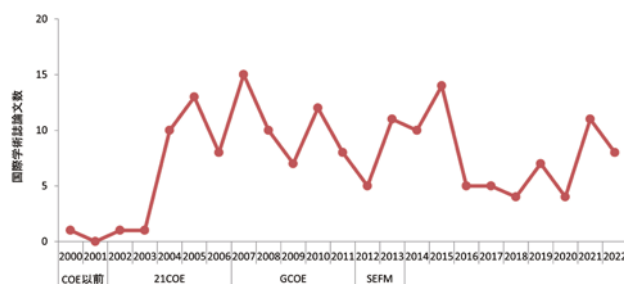


図3 院生・PDが第一著者として公刊した国際学術論文数の推移

薬系部局からの兼務教員もいるが人文・社会科学系の構成員による研究成果のみを掲載している。)

図3に、院生・ポスドクが第一著者となって出版された国際学術論文数の推移を示す。

以上のように、「国際的にインパクトのある研究成果の発信」という所期の目標に向け着実に進展している。

④ 国内外の研究拠点との連携強化を通じた、人間・社会科学における実験研究のための国際ネットワークの構築

本センターは、大型研究資金(新学術領域研究、科研費基盤 S など)の獲得などを通じて、国内外の主要研究拠点(英オックスフォード大学認知進化人類学研究所、独マックスプランク進化人類学研究所、香港科技大社会科学部、米ウィリアム&メリー大学心理学科、英ポーツマス大学心理学部・比較進化心理学センター、東京大学人文社会系研究科、京都大学文学研究科・情報学研究科・経済研究所、玉川大学 脳科学研究所、北陸先端総合科学大学院大学、名古屋大学情報学研究科、奈良先端科学技術大学院大学、産業技術総合研究所、国立環境研究所、統計数理研究所など)との間に共同研究体制を構築してきた。

2020 年 1 月 30 日付で日本学術会議が公開した「第 24 期学術の大型研究計画に関する マスタープラン」(マスタープラン 2020)では、学術大型研究計画(区分 I)の一つに「調和ある多様性に向けての新しい心理学の構築」が採択され、北海道大学もその実施機関に含まれている。同計画は、マスタープラン 2010、および文科省「最先端研究基盤事業」の補助対象事業としても採択された「心の先端研究のための連携拠点(WISH)構築」事業で積み重ねられた実績を、さらに次のフェーズへと飛躍させるものであると位置づけられている。

WISH 事業では、本センターに対してシーメンス社製 3 テスラ MAGNETOM Prisma(施設整備費補助事業; 3 億円)が導入され、現在も本センターの研究設備として稼働している。同装置は本学医歯学総合研究棟に設置され、本センターに所属するメンバーだけでなく、医学系から理学系、教育学系に至る全学の研究者によって幅広く利用されている。本装置の導入を通じて、学内の部局間に加え、学内外の先端研究拠点間の壁を超えた研究連携が推進されている。

(2)総括と今後の展望

以上のように、本センターは、教育および研究活動を通じて、社会科学実験の国際的中核拠点としての高い評価を確立してきた。こうした実績は、「社会科学実験に関する教育研究の進展に資することを目的とする」という本センターの設立目的に適うものである。

さがけ研究者の特任助教の着任に象徴されるように、当センターは秀逸な若手研究者の集まる拠点であることをは明白である。さらに、センター構成教員だけでなく若手研究者自身による国際的なネットワーク構築も本格化しつつある。

このように、本センターは社会科学実験の国際的中核拠点として、日々の研究教育活動を鋭意展開している。北海道大学の人文社会科学分野における屈指の先端研究拠点として、社会科学実験の国際的進展と普及に努めつつ、来るべき「人間・社会科学統合」に向けて世界的役割を果たしていくことが、本センターの今後の重要なミッションである。

資料 1 CERSS コロキウム、共催ワークショップ学術セミナー等

日付	タイトル	講演者
共催シンポジウム		
2022/7/28	ゲーミングとは何か？ — エネルギーシステムの教育と研究に基づく考察 —	鈴木研悟(筑波大学 理工情報生命学術院 システム情報工学研究群・助教)
招待講演		
2023/2/15	ハイパーデモクラシーを目指して：AI エージェントによる大規模合意形成支援プラットフォームの実現	伊藤孝行(京都大学情報学研究科・教授)
CERSS コロキウム		
2022/7/7	Focus! Caregiver-child interaction and socio-cognitive development in Japan and the U.S.	先崎沙和(ウィスコンシン大学グリーンベイク校・准教授)
2022/7/7	Advances in Research on Emotion Perception: Towards a "Globalization" of Cultural Psychology. (感情判断研究の進展：文化心理学の「グローバル化」にむけて)	増田貴彦(アルバータ大学心理学部・教授)
2022/8/25	途上国農村研究におけるフィールド実験の課題—国内農村研究への応用に向けて—	高篠仁奈(立命館大学政策科学部・准教授)
2022/10/3	進化ゲーム理論的合理性、相対的剥奪、社会的知性、社会的機会の不平等 — 山岸俊男氏の理論を Ultimatum Game の思考実験から再考する	山ロー男(シカゴ大学社会学部ラルフ・ルイス記念特別教授)
2022/12/12	数理モデルによる社会現象の記述の方法	板尾健司(東京大学総合文化研究科、マックスプランク進化人類学研究所)

資料 2 学外研究機関との共同研究による施設利用実績

2022 年度に本センターの参加者登録システムや実験設備のインフラを利用した実験は 21 件実施され、総実験室稼働日数は年間延べ 72 日、実験参加者総数は延べ 1,095 名であった。

さらに、2014 年度より利用を開始した磁気共鳴画像装置(MRI)の 2022 年度稼働日数は 118 日、実験参加者総数は 166 名であった。

資料 3 アウトリーチ活動

日付	タイトル	活動内容	実施者
2022/5/10	ウマのコミュニケーション能力・家畜化がコミュニケーション能力の進化に与えた影響に関する解説(ユーマニエンス 40 億年のたくらみ)“家畜”それは遺伝子の共進化)	TV 解説	瀧本彩加
2022/8/2	動画広告表示に於ける注視行動と内容理解に及ぼす文字サイズの効果 UCDA 2022 パッケージセミナー 消費者を守るコミュニケーションデザイン	講演	河原純一郎
2022/10/25	情報デザインと注意の制御 応用脳科学アカデミー 応用脳科学コンソーシアム	講演	河原純一郎
2022/11/7	ウマは他者とどううまく付き合う？：ウマのコミュニケーション能力を探る	講演	瀧本彩加
2022/11/17	補助資料媒体の種類が記入行動と容易さに及ぼす影響 UCDA アワード 2022 基調講演 ユニバーサルデザインコミュニケーション協会	講演	河原純一郎
2022/11/25	人を惹きつけるものは何か さっぽろ市民カレッジ 札幌市生涯学習総合センターちえりあ	講演	河原純一郎
2022/11/28	認知心理学から見た情報デザインと注意制御 北海道総合研究機構 令和 4 年度 MOT 研修会	講演	河原純一郎
2022/12/6	ウマの心理やその研究方法についての情報提供・取材協力 (テレビ朝日「科捜研の女 2022」)	取材協力	瀧本彩加
2022/12/7	2022.12.7 高校生のための認知心理学的広告表示解説法 旭川東高校	講演	河原純一郎
2022/12/9	環境配慮行動の促進に向けて：環境行動学のお話(ドルトン東京学園モデル教育プログラム)	講演	大沼進
2022/12/28	CHAIN の魅力とウマの心理に関する実験に関する取材協力 (いいね！北大 #192「意識」の異分野融合研究～主体性が育つ CHAIN の授業体験～)	取材協力	米村朱由(修士 1 年)
2022/12/19	職業座談会(札幌市立宮森中学校)	座談会	結城雅樹
2023/2/10	認知心理学から見たマスク顔でのコミュニケーション 札幌北高校	講演	河原純一郎
2023/3/3	レジ袋有料化に伴うコンビニエンスストアにおけるレジ袋辞退率の変化～札幌市における店頭観察調査～(容器包装簡素化勉強会)	講演・ディスカッション	大沼進

資料 4 競争的資金獲得状況の詳細

文部科学省科学研究費(代表)

(社会科学実験研究センター構成員が代表を務める研究について、2022 年度に交付された直接経費の総額)

資金名	期間(年度)	代表者(他・分担者数)	
研究課題			金額 (千円)
新学術領域研究 (研究領域提案型)	2018～ 2022	田中真樹	
知覚や行動に伴う心的時間の脳内機構とその 操作			42,900
基盤研究 (A)	2022～ 2025	高橋伸幸、他 4 名	
一般交換において用いられる評判情報を作りだ す情報統合過程の理論的・実証的検討			5,900
基盤研究 (A)	2020～ 2024	宮内泰介、他 12 名	
多層的で動的なプロセスとしてのコミュニティ: 実践論的アプローチによる研究			6,800
基盤研究(A)	2021～ 2024	田中真樹	
状況適応的な行動制御における大脳小脳連関 の役割			5,500
基盤研究 (B)	2018～ 2022	阿部匡樹、他 2 名	
「好不調の波」を抑える:身体表現の揺らぎ発現 メカニズムの解明			1,600
基盤研究 (B)	2021～ 2023	小川健二	
経頭蓋電気刺激による安静時脳活動の操作と 運動学習能力の制御			3,600
基盤研究 (B)	2019～ 2022	尾崎一郎、他 7 名	
相互監視と分散的制裁—情報ネットワーク社会 の法意識の解明による国家法の再定位—			2,300
基盤研究 (B)	2022～ 2026	大沼進、他 3 名	
分断を乗り越えた共通善を目指す合意形成過 程:功利主義 vs 多元的公正の超克			2,600
基盤研究 (B)	2022～ 2026	瀧本彩加	
共同養育とその心理基盤に関する比較認知発 達科学的研究			5,700
基盤研究 (B)	2021～ 2024	渡辺雅彦、他 1 名	
成体期における P/Q 型カルシウムチャネルのシ ナプス刈込みへの機能的関与の検証			2,400
基盤研究 (B)	2019～ 2022	結城雅樹	
称賛行動の比較社会生態心理学—褒め合う社 会と褒めない社会を分けるものは何か			2,800
基盤研究 (C)	2020～ 2023	河原純一郎、他 1 名	
過敏性腸症候群を不安モデル症例とした新しい 注意バイアス修正法の開発			3,600
基盤研究 (C)	2021～ 2023	松尾睦	
学習志向の決定要因に関する研究			1,000
挑戦的研究(萌芽)	2020～ 2022	小浜祥子、他 3 名	
人質による合意保証メカニズムの研究			1,500

挑戦的研究(萌芽)	2022～ 2024	小川健二	
脳状態可視化に基づく内受容注意モニタリング システム開発とマインドフルネスへの応用			1,700
挑戦的研究(萌芽)	2022～ 2024	田中真樹	
n-back 課題を用いた中央実行系の神経機構の 解明			2,700
若手研究	2021～ 2024	小倉有紀子	
柔軟な社会情報利用戦略の神経基盤			1,000

文部科学省科学研究費(分担)

(社会科学実験研究センター構成員が分担者を務める研究について、2022 年度に社会科学実験研究センター兼務教員に配分された分担額)

資金名	期間(年度)	分担者	
研究課題			金額(千円)
特別推進研究	2020～2024	渡辺雅彦(代表: 柚崎 通介、他 6 名)	
細胞外足場タンパク質によるシナプス・非シナ プス機能制御機構の解明			10,000
学術変革領域研究 (学術研究支援基盤 形成)	2022～2027	渡辺雅彦 (代表:鍋倉 淳一、他 36 名)	
先端バイオイメージング支援プラットフォーム			8,000
国際共同研究加速基 金(国際共同研究強 化(B))	2018～2023	小浜祥子 (代表: 多湖 淳、他 2 名)	
サーベイ実験による政治情報伝達現象の国 際協働研究			300
基盤研究 (A)	2022～2026	小浜祥子 (代表:多胡 淳、他 5 名)	
国際関係をめぐる不満の国際比較実証研究			250
基盤研究 (A)	2020～2023	金子沙永 (代表: 栗木 一郎、他 6 名)	
色情報の脳内処理過程と知覚との対応			650
基盤研究 (A)	2020～2023	小浜祥子 (代表: 久米 郁男、他 10 名)	
政治的分極化の総合的研究			200
基盤研究 (A)	2021～2026	小浜祥子 (代表:久保 文明、他 19 名)	
現代アメリカにおける政治的地殻変動:政党 再編と政策的収斂			255
基盤研究 (A)	2019～2022	小川健二 (代表: 乾 敏 郎、他 1 名)	
身体イメージを基礎とする社会的認知過程の 自由エネルギー原理による統一的理解			900
基盤研究 (B)	2022～2025	小浜祥子(代表: 清水 直樹、他 5 名)	
選挙対策としての政策変更:選挙の存在が政 策に及ぼす影響の包括的分析			400
基盤研究 (B)	2020～2023	河原純一郎 (代表: 近 藤洋史)	
知覚と注意のゆらぎのメカニズムを脳活動と 自律神経系から統合的に理解する			400
基盤研究 (B)	2019～2022	河原純一郎 (代表: 山 口真美、他 1 名)	
乳児の視覚的注意の発達から意識の形成過 程を実験的に検討する			300

基盤研究 (B)	2021～2025	松尾睦 (代表: 高嶋克義、他 8 名)	
小売企業の仕入プロセス革新による優位性構築に関する研究			200
基盤研究 (B)	2021～2025	大沼進 (代表: 安藤香織、他 3 名)	
多角的無知が環境配慮行動を阻害するプロセスの解明ー国際比較調査・実験による検討			130
基盤研究 (B)	2021～2023	渡辺雅彦 (代表: 安部崇重、他 4 名)	
モーションキャプチャを用いた熟練の腹腔鏡手術手技の言語化・見える化と手術教育支援			167
基盤研究 (B)	2022～2024	宮内泰介 (代表: 菅豊、他 9 名)	
ヴァナキュラー概念を用いた文化研究の視座の構築ー民俗学的転回のためにー			200
基盤研究 (B)	2022～2025	大沼進 (代表: 鈴木研悟、他 3 名)	
AIと人間のゲームプレイを統合するエネルギー政策評価法の提案			200
基盤研究 (C)	2021～2023	河原純一郎 (代表: 佐藤広英、他 1 名)	
潜在連合テストによるスマートフォン依存リスク検出の試み			100
基盤研究 (C)	2021～2024	大沼進 (代表: 水田恵三、他 2 名)	
なぜ戻り、どのように復興しようとしているのかー原発被害者の帰住に関する研究ー			50
基盤研究 (C)	2021～2023	大沼進 (代表: 大澤英昭、他 1 名)	
高レベル放射性廃棄物地層処分施設の立地方策選定過程が社会的受容に与える影響			50
基盤研究 (C)	2019～2022	瀧本彩加 (代表: 中道正之、他 1 名)	
サル、ウマ、展示動物を対象とした「出会い」と「別れ」に関する行動研究			883
基盤研究 (C)	2021～2024	渡辺雅彦 (代表: 七戸俊明、他 1 名)	
医療機器開発における献体使用の基盤構築			100
挑戦的研究(開拓)	2021～2024	高橋泰城 (代表: 松井知子、他 5 名)	
統計・機械学習による異分野相関を俯瞰する方法論の確立			1000

文部科学省科学研究費を除く研究助成

社会科学実験研究センター構成員が代表及び分担者を務める研究について、2022 年度に社会科学実験研究センター兼務教員に交付・配分された金額)

資金名	期間	代表者・分担者	
研究課題			金額 (千円)
環境省(環境再生保全機構) 環境総合推進費	2022～2024	大沼進、他 1 名	
県外最終処分・周辺地域の将来デザイン利用に向けた社会受容性評価と合意形成フレームワークに関する研究 県外最終処分等に関わる多角的公正の整理および実験的評価			7,000
科学技術融合振興財団調査研究 助成	2020～2022	大沼進、他 1 名	
対立する価値を超えた合意案の創発を見出すゲーミング開発			852
国立研究開発法人科学技術振興機構 戦略的創造研究推進事業 (JST CREST)	2020～2025	大沼進 (代表: 伊藤孝行、他 3 名)	
ハイパーデモクラシー: ソーシャルマルチエージェントに基づく大規模合意形成プラットフォームの実現			4,100
環境省(環境再生保全機構) 環境研究総合推進費	2021～2025	大沼進 (代表: 大迫政浩、他 9 名)	
3R プラスと海洋プラスチック排出抑制対策に係る評価システムの構築			1,538
生理学研究所共同利用研究	2022	阿部匡樹、他 2 名	
共同行為の神経基盤: 三名同時脳活動計測によるアプローチ			650
戦略的創造研究推進事業(さきがけ)	2022～2025	小倉有紀子	
共生の条件を探る: 価値観の融和はどこまで可能か?			920

2022 年度研究業績一覧

【著書・分担執筆(洋書)】

Miyauchi, T., & Fukunaga, M. (2022). *Adaptive Participatory Environmental Governance in Japan: Local Experiences, Global Lessons*. Springer.

【著書・分担執筆(和書)】

河原純一郎・宮崎由樹. (2022). マスクの心理学. 山口真美・河野哲也・床呂郁哉(編集). 「コロナ時代の身体コミュニケーション」. 勁草書房.

宮下保司(監修), Kandel, E.R., Koester, J.D., Mack, S., Siegelbaum, S.(編集), 岡野栄之, 神谷之康, 合田裕紀子, 加藤総夫(医学), 藤田一郎, 伊佐正, 定藤規弘, 大隅典子, 井ノ口馨, 笠井清登(翻訳). (2022). *カンデル神経科学(第2版)*. メディカル・サイエンス・インターナショナル.

【学術雑誌(国際誌)】

Dudarev, V., Kamatani, M., Miyazaki, Y., Enns, J. T., & Kawahara, J. I. (2022). The Attractiveness of Masked Faces Is Influenced by Race and Mask Attitudes, *Frontiers in Psychology*, **13**, 86493, doi:10.3389/fpsyg.2022.864936.

Hasebe, R., Murakami, K., Harada, M., Halaka, N., Nakagawa, H., Kawano, F., Ohira, Y., Kawamoto, T., Yull, F. E., Blackwell, T. S., Nio-Kobayashi, J., Iwanaga, T., Watanabe, M., Watanabe, N., Hotta, H., Yamashita, T., Kamimura, D., Tanaka, Y., & Murakami, M. (2022). ATP spreads inflammation to other limbs through crosstalk between sensory neurons and interneurons. *The Journal of experimental medicine*, **219**(6), e20212019, doi:10.1084/jem.20212019.

Hashimoto, M., Fujimoto, M., Konno, K., Lee, M-L., Yamada, Y., Yamashita, K., Toda, C., Tomura, M., Watanabe, M., Inanami, O., & Kitamura, H. (2022). Ubiquitin-Specific Protease 2 in the Ventromedial Hypothalamus Modifies Blood Glucose Levels by Controlling Sympathetic Nervous Activation. *The Journal of neuroscience*, **42**(23), 4607-4618, doi:10.1523/JNEUROSCI.2504-21.2022.

Kamatani, M., Miyazaki, Y., & Kawahara, J. I. (2023). Occlusion of faces by sanitary masks improves facial attractiveness of other races, *Frontiers in Psychology*, **13**, 953389, doi:10.3389/fpsyg.2022.953389.

Kawai, T., Narita, H., Konno, K., Akter, S., Andriani, R. T., Iwasaki, H., Nishikawa, S., Yokoi, N., Fukata, Y., Fukata, M., Wiriyasermkul, P., Kongpracha, P., Nagamori, S., Takao, K., Miyakawa, T., Abe, M., Sakimura, K., Watanabe, M., Nakagawa, A., & Okamura, Y. (2022). Insight into the function of a unique voltage-sensor protein (TMEM266) and its short form in mouse cerebellum. *The Biochemical journal*, **479**(11), 1127-1145, doi:10.1042/BCJ20220033.

Kohama, S., Himichi, T., Inamasu, K., Mifune, N., Ohtsubo, Y., & Tago, A. (2022). Crafting international apologies that work: A conjoint analysis approach, *Conflict Management and Peace Science*, 73889400000000, doi:10.1177/07388942221094761.

Kuroda, K., Ogura, Y., Ogawa, A., Tamei, T., Ikeda, K., & Kamada, T. (2022). Behavioral and neuro-cognitive bases for emergence of norms and socially shared realities via dynamic interaction. *Communications Biology*, **5**(1), 1379-1379, doi:10.1038/s42003-022-04329-1.

Lun, V. M. C., Smith, P. B., Grigoryan, L., Torres, C., Papastyl-ianou, A., Lopukhova, O. G., Sunar, D., Easterbrook, M. J., Koc, Y., Selim, H. A., Chobthamkit, P., Chaleeraktragoon, T., Gul, P., Floriano, L. P., Diaz-Loving, R., Kwantes, C. T.,

Yuki, M., Ogusu, N., van Osch, Y., Texeira, M. L. M., Hu, P., Abbas, A., Tripodi, D., Lay, S., Efremova, M., Hassan, B., Ahmad, A., al-Bayati, A., Anderson, J., Cross, S. E., Delfino, G. I., Gamsakhurdia, V., Gavreliuc, A., Gavreliuc, D., Gunsoy, C., Rivera, P. E. D., & Hakobjanyan, A. (2023). Need for approval from others and face concerns as predictors of interpersonal conflict outcome in 29 cultural groups, *International Journal of Psychology*, doi:10.1002/ijop.12895.

Maezawa, T., & Kawahara, J. I. (2022). Processing symmetry between visual and auditory spatial representations in updating working memory, *Quarterly Journal of Experimental Psychology*, **76**(3), 174702182211032, doi:10.1177/17470218221103253.

Matsuda, N., & Abe, M. O. (2022). Imitation inhibition and facial expression recognition: imitation-inhibition training inhibits the impact of interference with facial mimicry. *Cognitive Studies*, **29**(4), 587-594, doi:10.11225/cs.2022.048.

Matsuda, N., & Abe, M. O. (2022). Implicit motor adaptation driven by intermittent and invariant errors, *Jxiv*, doi:10.51094/jxiv.177.

Matsushima, T., Miura, M., Patzke, N., Toji, N., Wada, K., Ogura, Y., Homma, K. J., Sgadò, P., & Vallortigara, G. (2022). Fetal blockade of nicotinic acetylcholine transmission causes autism-like impairment of biological motion preference in the neonatal chick. *Cerebral Cortex Communications*, doi:10.1093/texcom/tgac041.

Miyauchi, T. (2022). Reeds and Rights: Dynamism of Legitimacy Construction in the Collective Management of Natural Resources, *Adaptive Participatory Environmental Governance in Japan*, 15-31, doi:10.1007/978-981-16-2509-1_2.

Miyazaki, M., Ishikawa, K., Nakashima, K., Shimizu, H., Takahashi, T., & Takahashi, N. (2023). Application of the symbolic regression program AI-Feynman to psychology, *Frontiers in Artificial Intelligence*, **6**, 1039438, doi:10.3389/frai.2023.1039438.

Miyazaki, Y., Kamatani, M., Suda, T., Wakasugi, K., Matsunaga, K., & Kawahara, J. I. (2022). Effects of wearing a transparent face mask on perception of facial expressions, *i-Perception*, **13**(3), 204166952211059, doi:10.1177/20416695221105910.

Nayani, F. Z., Yuki, M., Maddux, W. W., & Schug, J. (2023). Lay theories about emotion recognition explain cultural differences in willingness to wear facial masks during the COVID-19 pandemic., *Current research in ecological and social psychology*, **4**, 100089, doi:10.1016/j.cresp.2023.100089.

Ogura, Y., Wakatsuki, Y., Hashimoto, N., Miyamoto, T., Nakai, Y., Toyomaki, A., Tsuchida, Y., Nakagawa, S., Inoue, T., & Kusumi, I. (2023). Hyperthymic temperament predicts neural responsiveness for monetary reward. *Journal of Affective Disorders*, **320**, 674-681, doi:10.1016/j.jad.2022.09.

Ohata, R., Ogawa, K., & Imamizu, H. (2022). Neuroimaging Examination of Driving Mode Switching Corresponding to Changes in the Driving Environment., *Frontiers in human neuroscience*, **16**, 788729, doi:10.3389/fnhum.2022.788729.

Ohtsubo, Y., Himichi, T., Inamasu, K., Kohama, S., Mifune, N., & Tago, A. (2022). Can Ingroup Opposition to Political Apologies Be Mitigated? Negative Evidence for Dissociation from the Past and Praise for the Present System, *Japanese Journal of Social Psychology*, **38**(2), 25-32, doi:10.14966/jssp.2120.

Okada, K., Takeya, R. & Tanaka, M. (2022). Neural signals regulating motor synchronization in the primate deep cerebellar nuclei, *Nature Communications*, **13**(1), 2504, doi:10.1038/s41467-022-30246-2.

- Sasamori, H., Asakura, T., Sugiura, C., Boucheikioua, Y., Nishitani, N., Sato, M., Yoshida, T., Yamasaki, M., Terao, A., Watanabe, M., Ohmura, Y., & Yoshioka, M. (2022). Behavioral characteristics of dopamine D5 receptor knockout mice, *Scientific Reports*, **12**(1), 6014, doi:10.1038/s41598-022-10013-5.
- Sawagashira, R., & Tanaka, M. (2022). Nicotine promotes the utility of short-term memory during visual search in macaque monkeys. *Psychopharmacology*, **239**(9), 3019-3029, doi:10.1007/s00213-022-06186-6.
- Takada, M., Shirai, K., Murakami, M., Ohnuma, S., Nakatani, J., Yamada, K., Osako, M., & Yasutaka, T. (2022). Important factors for public acceptance of the final disposal of contaminated soil and wastes resulting from the Fukushima Daiichi nuclear power station accident, *PLoS ONE*, **17**(6), e0269702, doi:10.1371/journal.pone.0269702.
- Takamiya, S., Kawabori, M., Yamazaki, K., Yamaguchi, S., Tanimori, A., Yamamoto, K., Ohnishi, S., Seki, T., Konno, K., Tha, K. K., Hashimoto, D., Watanabe, M., Houkin, K., & Fujimura, M. (2022). Intravenous transplantation of amnion-derived mesenchymal stem cells promotes functional recovery and alleviates intestinal dysfunction after spinal cord injury. *PLoS ONE*, **17**(7), e0270606, doi:10.1371/journal.pone.0270606.
- Tanda, T., Toyomori, K., & Kawahara, J. I. (2022). Attentional biases toward real images and drawings of negative faces, *Acta Psychologica*, **229**, 103665, doi:10.1016/j.actpsy.2022.103665.
- Tsurumi, S., Kanazawa, S., Yamaguchi, M. K., & Kawahara, J. I. (2022). Infants' anticipatory eye movements: feature-based attention guides infants' visual attention, *Experimental Brain Research*, **240**(9), 2277-2284, doi:10.1007/s00221-022-06428-1.
- Tsurumi, S., Kanazawa, S., Yamaguchi, M. K., & Kawahara, J. I. (2022). Development of upper visual field bias for faces in infants, *Developmental Science*, **26**(1), 13262, doi:10.1111/desc.13262.
- Uemura, T., Suzuki-Kouyama, E., Kawase, S., Kurihara, T., Yasumura, M., Yoshida, T., Fukai, S., Yamazaki, M., Fei, P., Abe, M., Watanabe, M., Sakimura, K., Mishina, M., Tabuchi, K. (2022). Neurexins play a crucial role in cerebellar granule cell survival by organizing autocrine machinery for neurotrophins, *Cell Reports*, **39**(1), 110624, doi:10.1016/j.celrep.2022.110624.
- Wakatsuki, Y., Ogura, Y., Hashimoto, N., Toyomaki, A., Miyamoto, T., Nakagawa, S., Inoue, T., & Kusumi, I. (2022). Subjects with bipolar disorder showed different reward system activation than subjects with major depressive disorder in the monetary incentive delay task. *Psychiatry and clinical neurosciences*, **76**(8), 393-400, doi:10.1111/pcn.13429.
- Yamauchi, K., Okamoto, S., Ishida, Y., Konno, K., Hoshino, K., Furuta, T., Takahashi, M., Koike, M., Isa, K., Watanabe, M., Isa, T., & Hioki, H. (2022). Fluorochromized tyramide-glucose oxidase as a multiplex fluorescent tyramide signal amplification system for histochemical analysis. *Scientific reports*, **12**(1), 14807, doi:10.1038/s41598-022-19085-9.
- Yang, H., & Ogawa, K. (2022). Decoding of Motor Imagery Involving Whole-body Coordination., *Neuroscience*, **501**, 131-142, doi:10.1016/j.neuroscience.2022.07.029.
- Zhao, Q., Ito, T., Soko, C., Hori, Y., Furuyama, T., Hioki, H., Konno, K., Yamasaki, M., Watanabe, M., Ohtsuka, S., Ono, M., Kato, N., & Yamamoto, R. (2022). Histochemical characterization of the dorsal raphe-periaqueductal grey dopamine transporter neurons projecting to the extended amygdala., *eNeuro*, **9**(3), 0121-22.2022, doi:10.1523/ENEURO.0121-22.2022.
- Zhou, L., Konno, K., Yamazaki, M., Abe, M., Natsume, R., Watanabe, M., Takebayashi, H., & Sakimura, K. (2022). Nna1, Essential for Purkinje Cell Survival, Is also Associated with Emotion and Memory, *International Journal of Molecular Sciences*, **23**(21), 12961, doi:10.3390/ijms232112961.

【学術雑誌(国内誌)】

- 堀裕亮・谷藤誠斗・戸松太一・上野将敬・村山美穂・河合正人・瀧本彩加. (2022). 北海道和種馬における母ウマの子育ての特徴を予測する統計モデルの構築, DNA 多型, **30**(1), 16-20.
- 尾崎一郎. (2023). 政教分離の語り方(下) —法と宗教のミスコミュニケーション—, 法律時報, **95**(2), 70-75.
- 尾崎一郎. (2022). 政教分離の語り方(上) —法と宗教のミスコミュニケーション—, 法律時報, **95**(1), 91-96.
- 尾崎一郎. (2022). 法をめぐるミスコミュニケーション 企画趣旨, 法律時報, **95**(1), 90-90.
- 尾崎一郎. (2022). 放置不動産と人格的価値, 秋山靖浩編著『新しい土地法:人口減少・高齢化社会の土地法を描く』(日本評論社), **89**, 115-115.
- 尾崎一郎. (2022). 法の前の神々、神々の前の法, 論究ジュリスト, **38**, 204-212.
- 相馬ゆめ・横山実紀・中澤高師・辰巳智行・大沼 進. (2022). 低濃度除去土壌県外処理問題を題材とした集団討議実験—共通善の観点を巡る議論と討議の質を可視化する指標の開発—, リスク学研究, **32**(1), 11-23, doi:10.11447/jjra.sra-0387
- 高橋伸幸・清成透子・三船恒裕・松本良恵. (2023). 人類史研究における社会科学の役割, 心理学評論, **65**(2), 135-149.

【学会発表(国際学会)】

- Abe, K., Okada, K., & Tanaka, M. (2022). Rule of cerebro-cerebellar interaction in error monitoring and adaptive control. *JAN-UBET Symposium 2022, Kyoto University*.
- Abe, K., Okada, K., & Tanaka, M. (2022). Functional linkage between medial frontal cortex and cerebellum in behavioral error detection. *International Symposium on Chronogenesis 2022*.
- Freeman J., Yamamoto, S., & Yuki, M. (2022). Empathic Concern as a Social-Ecological Adaptation: The Role of Relational Mobility. *Max Planck Summer Institute on Bounded Rationality*.
- Freeman, J., & Schug, J. (2023). Pathogen Prevalence as a Predictor of Racial Preferences in Marriage and Dating. *2023 Society for Personality and Social Psychology Annual Convention*.
- Haruki, Y., Suzuki, K., & Ogawa, K. (2022). Neural dynamics during experiencing different types of interoception. *The 25th edition of the ASSC meeting*.
- Inoue, Y., Matsumoto, Y., Takahashi, N., & Kiyonari, T. (2022). The possible effect of decision synchronization in sustaining voluntary cooperation in a repeated social dilemma game. *19th International Conference on Social Dilemmas*.
- Kamatani, M., Yamauchi, K., Tomoyuki, T., Maezawa, T., & Kawahara, J. I. (2022). Attractiveness amplification effect of the loss of asymmetry in profiles. *Vision Science Society 22th Annual meeting*.
- Li, L., Okada, K., & Tanaka, M. (2022). Cerebellar Purkinje cell activity during temporal prediction of periodic events. *JAN-UBET Symposium, Kyoto, 2022*.

- Li, L., Okada, K., & Tanaka, M. (2022). Activity in cerebellar Purkinje cells during temporal prediction of rhythmic visual stimulus. *International Symposium on Chronogenesis 2022*.
- Maeda, Y., & Yuki, M. (2023). Why does relational mobility lead to cultural differences in pride and embarrassment after success? The Role of Competitive vs. Conformity Motivations. *2023 Society for Personality and Social Psychology Annual Convention*.
- Matsuda, N., Abe, M.O. (2022). Implicit motor adjustment based on errors caused by external sources. *The 45th Annual Meeting of the Japan Neuroscience Society*.
- Ohnuma, S. (2022). Experimental democracy: consensus process towards diverse common goods. *3rd Joint ERCIM-JST Workshop*.
- Takahashi, N., Kawamura, I., Okamoto, Y., & Mashima, R. (2022). What kind of information are people willing to spread in situations of indirect reciprocity? *19th International Conference on Social Dilemmas*.
- Takahashi, N., Tateishi, W., Mizutori, S., & Higashi, Y. (2022). Subjective reliability of the information that people acquired through different routes. *19th International Conference on Social Dilemmas*.
- Tanaka, M. (2022). Role of the cerebellum in rhythm processing. *Johns Hopkins Cerebellum Seminar*.
- Tanaka, M. (2022). Neural representation of internalized rhythms in the cerebellum and basal ganglia. *JANUBET Symposium 2022 "Tools and the Study of Brain Systems. New Vistas!"*
- Tanaka, M. (2022). Sensory and motor representations of internalized rhythms in subcortical brain regions. *International Symposium on Chronogenesis: How the Mind Generates Time (第1回時間生成学国際シンポジウム)*.
- Tanaka, M. (2022). Rhythm processing in the cerebellum and basal ganglia. *The 52nd NIPS International Symposium on "Frontiers in Primate Systems Neuroscience"*.
- Tanaka, M. (2023). Rhythm processing in the cerebellum and basal ganglia. *2023 Sharif Neuroscience Symposium*.
- Tanda, T., Toyomori, K., & Kawahara, J. I. (2022). Attentional biases toward real images and drawings of negative faces. *Vision Sciences Society 20th Annual meeting, online*.
- Tateishi, W., & Takahashi, N. (2022). Does cooperation beyond group boundaries cause damage to reputation?: An experimental study of the reputation of universalists and collectivists. *19th International Conference on Social Dilemmas*.
- Zhu, Y., Sun, X., Yuki, M., Liu, Z., & Yuan, Y. (2022). Signaling with conspicuous consumption: the role of relational mobility. *2022 International Congress of International Association for Cross Cultural Psychology*.
- Zhu, Y., Sun, X., Yuki, M., Liu, Z., & Yuan, Y. (2023). A Social-ecological Approach to Conspicuous Consumption in Different Societies: the Role of Relational Mobility. *2023 Society for Personality and Social Psychology Annual Convention*.
- 【学会発表(国内学会)】**
- 阿部匡樹. (2022). コミュニケーションの神経科学: 共同行為に潜む社会性. 運動と脳の勉強会第13回例会.
- 阿部匡樹. (2022). 共同行為の神経基盤を探る: Hyperscanning fMRI による挑戦. 第63回日本社会心理学会ワークショップ「学際的な社会心理学の構築を目指して—若手研究者のための教育講演—」.
- 安藤香織・足立千尋・神原歩・杉浦淳吉・張芸誼・大沼進. (2022). 環境コミュニケーションにおける他者の影響の決定木分析. 日本社会心理学会第63回大会.
- 安藤香織・大沼進・神原歩・杉浦淳吉・金山英莉花・張芸誼. (2022). 環境問題に関する会話は何に影響されるのか—多元的無知の観点からの検討. 日本グループ・ダイナミクス学会第68回大会.
- 晴木祐助・小川健二. (2022). Viscerotopy in the anterior insula? Multivoxel pattern analysis study for explicit interoception. 第5回ヒト脳イメージング研究会.
- 晴木祐助・鈴木啓介・小川健二. (2022). 内受容感覚への注意とその知覚正確性に関わる神経基盤. 日本発達神経科学会第11回大会.
- 晴木祐助・鈴木啓介・小川健二. (2022). 内受容感覚の感覚信号精度が視知覚の主観的確信度を変容させる. 日本認知心理学会第20回大会.
- 晴木祐助・鈴木啓介・小川健二. (2022). 胃と心臓の内受容感覚に関わる個人差とその脳内ネットワークの差異: fMRI 研究. 日本認知科学会第39回大会.
- 今井史・小川健二. (2022). Visual motion imagery の鮮明性に球技経験が及ぼす効果の検討. 北海道心理学会・東北心理学会第13回合同大会.
- 今井史・篠崎淳・齊藤秀和・長濱宏史・櫻井佑樹・長峯隆・小川健二. (2022). 運動の実技とイメージに共通した一次運動野の神経表象-表象類似性分析を用いた検討-. 日本イメージ心理学会第23回大会.
- 伊藤資浩・反田智之・河原純一郎. (2022). 外眼角と口角の近傍に位置するほくろが顔の魅力に及ぼす影響. 日本心理学会第86回, 3EV-047-PI, 日本大学文理学部.
- 鎌谷美希・宮崎由樹・河原純一郎. (2022). 衛生マスクは若者顔の印象のみを向上させる. 日本認知心理学会第20回大会.
- 金井裕美子・高田モモ・大沼進・保高徹生. (2022). 除去土壌等の県外最終処分における市民からみた重要事項の抽出-仮想ステークホルダーへのインタビュー結果に基づく検討-. 日本リスク学会第35回年次大会.
- 川村樹・真島理恵・高橋伸幸. (2022). 一般交換状況における情報伝達バイアス. 日本人間行動進化学会第15回大会.
- 川村樹・真島理恵・高橋伸幸. (2022). 間接互惠性状況における、情報伝達バイアスの至近因の検討. 日本社会心理学会第63回大会.
- 前田友吾・結城雅樹. (2022). 関係流動性はなぜ成功状況での誇りと羞恥の経験を左右するのか 自己意識的感情の動機付けに注目した検討. 日本社会心理学会第63回大会.
- 松田直祥・阿部匡樹. (2022). 健常者における運動主体感の主観的な異常性と行為—結果の時間知覚の関係. 第16回MotorControl研究会.
- 宮崎聖人・高橋伸幸. (2022). 一般的信頼および見知らぬ他者と協力する傾向が両方高く学習される条件の検討. 日本社会心理学会第63回大会.
- 宮崎聖人・高橋伸幸. (2022). 一般的信頼および見知らぬ他者と協力する傾向が両方高く学習される条件の検討. 日本社会心理学会第63回大会.
- 宮崎由樹・鎌谷美希・須田朋和・若杉慶・松長芳織・河原純一郎. (2022). 透明なマスクの着用が顔表情認知に及ぼす影響: 小学生と成人データの比較. 日本認知心理学会第20回大会.
- 水田恵三・大沼進. (2022). 原発災害後帰郷を促す要因は何か: 浪江町の場合. 日本心理学会第86回大会.
- 水鳥翔伍・高橋伸幸. (2022). パロキアリズムと関連する社会的要因の探索: Romano et al. (2021) の再分析. 日本社会心理学会第63回大会.
- 森康浩・中俣友子・桑山りさ・大沼進. (2022). ポイ捨てに特化した行動モデルの構築. 第33回廃棄物資源循環学会研究発表会.
- 村山紗英・河原純一郎. (2022). VR 場面内の自由な自動車運転行動による拡散的思考の促進効果. 日本基礎心理学会第41回大会.
- 新井田光希・晴木祐助・今井史・小川健二. (2022). 持続時間ベース及びビートベースの知覚的タイミングにおけるトップダウン処理の神経基盤. 北海道心理学会・東北心理学会第13回合同大会.
- 野波寛・大沼進・青木俊明・大友章司. (2022). 忌避施設の決定権は住民か公的機関か: カナダの地層処分場をめぐる道徳基盤と信頼性の効果. 日本リスク学会第35回年次大会.
- 小川健二. (2022). ヒトの運動や身体意識に関わる神経表象の解説. 第20回脳科学研究教育センターシンポジウム.

- 小楠なつき・結城雅樹. (2022). 「コロナ禍による関係流動性および一般的信頼の変化 日米における追跡調査による検討」. 日本心理学会第 69 回大会.
- 大沼進. (2022). 『民主主義の実験』を巡る社会心理学への期待. 日本社会心理学会第 63 回大会.
- 大沼進・柴田侑秀・相馬ゆめ. (2022). 多元的公正からみた除去土壌問題. 日本リスク学会第 35 回年次大会.
- 大澤英昭・大沼進. (2022). 高レベル放射性廃棄物地層処分施設のサイト選定方式と補償方針が公正さや受容に与える影響. 日本リスク学会第 35 回年次大会.
- 柴田侑秀・相馬ゆめ・辻本光英・大沼進・保高徹生. (2022). 除去土壌県外処分をめぐる模擬市民参加ワークショップの試み. 日本リスク学会第 35 回年次大会.
- 相馬ゆめ・中澤高師・辰巳智行・大沼進. (2022). 福島県低濃度除去土壌県外処理問題における最不遇者情報が集団議論にもたらす効果: 多元的共通善に関する討議の質の比較. 日本リスク学会第 35 回年次大会.
- 相馬ゆめ・中澤高師・辰巳智行・大沼進. (2022). 公共的討議における最不遇者情報が議論評価に与える効果: 低濃度除去土壌県外処理問題を題材とした集団討議実験. 日本社会心理学会第 63 回大会.
- 瀧本(猪瀬)彩加. (2022). ウマは他者とどううまく付き合う?: ウマのコミュニケーション能力を探る. 第 18 回 NIBB 行動研究会.
- 瀧本彩加. (2022). 霊長類における協力的行動の進化を支える心理基盤—ヒト以外の動物に見られるモラルの萌芽—. 第 24 回人間知・脳・AI セミナー.
- 瀧本彩加・藤田和生. (2022). 協力は、フサオマキザルのコストを伴う向社会的な報酬分配を促進するか?. 関西心理学会第 123 回大会.
- 田中真樹. (2022). 時間の神経生理学. 第 13 回 時間言語フォーラム「時間研究の神経学・神経科学」.
- 田中真樹. (2023). 小脳による行動モニタリング. 令和 4 年度システム神経科学研究会.
- 反田智之・河原純一郎. (2022). 注意の積極的抑制は潜在標的特徴の種類数に依存する. 日本基礎心理学会第 41 回大会, 千葉大学西千葉キャンパス.
- 反田智之・河原純一郎. (2022). 注意の特徴ベースの抑制テンプレートは積極的抑制に基づく. 北海道心理学会第 69 回大会 (兼・北海道心理学会・東北心理学会第 13 回合同大会), 北海道大学.
- 反田智之・河原純一郎. (2022). 湯気表現が食品及び店舗評価に及ぼす影響. 日本心理学会第 86 回, 3EV-047-PI, 日本大学文学部.
- 反田智之・河原純一郎. (2022). 積極的抑制か探索後抑制かは手がかりの有効度に依存する. 日本心理学会「注意と認知」第 20 回記念研究会, ホテル機山館.
- 反田智之・豊森開・河原純一郎. (2022). 実物顔とイラスト顔に対する注意バイアスの検討. 第 9 回 顔身体学領域会議, P1-5A, オンライン開催.
- 辻本光英・河合康介・見砂太一・横山実紀・大沼進. (2022). 異なる利害を持つステークホルダーの共有資源管理をめぐる合意形成過程—地熱発電交渉ゲームを用いた検討—. 日本シミュレーション&ゲーミング学会 2022 年度秋期全国大会.
- 鶴見周摩・反田智之・河原純一郎. (2022). 生足による注意捕捉効果. 北海道心理学会第 69 回大会 (兼・北海道心理学会・東北心理学会第 13 回合同大会), 北海道大学.
- 上田江里子・山縣豊樹・久保孝富・瀧本-猪瀬彩加. (2022). 人馬一体感はどのようなときに生起するのか?—乗馬時のヒト・ウマ運動同期との関連性に関する定量的検討の計画—. 第 4 回協調的社会脳研究会.
- 山縣豊樹・上田江里子・久保孝富・瀧本-猪瀬彩加. (2022). 人馬一体感を身体性から再考する—ヒト身体性に乗馬中のヒト・ウマ運動同期が及ぼす影響の定量的検討 (研究計画). 日本人間行動進化学会第 15 回大会.
- 米村朱由・松井大・瀧本-猪瀬彩加. (2022). 同種個体またはヒトパートナーによる不公平な報酬分配に対するウマの忌避反応の比較 (研究計画). 日本人間行動進化学会第 15 回大会.

付録 組織構成員

(2023 年 3 月現在)

(1) 専任教員

小倉有紀子 社会科学実験研究センター・特任助教
JST さきがけ研究者

(1) 兼務教員一覧

大沼進	文学研究院・教授、 社会科学実験研究センター長
田中真樹	医学研究院・教授、 社会科学実験研究副センター長
宮内泰介	文学研究院・教授
尾崎一郎	法学研究科附属高等法政教育研究センター・教授
五十嵐洋介	公共政策学連携研究部・准教授
小浜祥子	公共政策学連携研究部・准教授
松尾睦	経済学研究院・教授
矢部一郎	医学研究院・教授
渡辺雅彦	医学研究院・教授
結城雅樹	文学研究院・教授
高橋泰城	文学研究院・准教授
高橋伸幸	文学研究院・教授
竹澤正哲	文学研究院・教授
小川健二	文学研究院・准教授
瀧本彩加	文学研究院・准教授
河原純一郎	文学研究院・教授
金子沙永	文学研究院・准教授
河西哲子	教育学研究院・教授
阿部匡樹	教育学研究院・准教授
中島晃	文学研究院・助教

(2) 連携研究員一覧

坂上雅道 玉川大学脳科学研究所、
大学院脳情報研究科・教授

亀田達也	東京大学大学院人文社会系研究科・ 教授
増田貴彦	アルバータ大学・教授
Harvey Whitehouse	オックスフォード大学・教授
Kim-Pong Tam	香港科技大学・准教授
仲 真紀子	理化学研究所・理事

(3) 運営委員会委員一覧

大沼進	文学研究院・教授、 社会科学実験研究センター長
田中真樹	医学研究院・教授
須賀宜仁	公共政策学連携研究部・教授
米田雅宏	法学研究科・教授
相馬雅代	理学研究院・准教授
岩下明裕	スラブ・ユーラシア研究センター・教授
小川健二	文学研究院・准教授
尾崎一郎	法学研究科・教授
河西哲子	教育学研究院・教授
松尾睦	経済学研究院・教授

(4) 研究倫理委員会委員一覧

高橋伸幸	文学研究院・教授
松尾睦	経済学研究院・教授
石井敬子	名古屋大学情報学研究科・教授
河合正人	北方生物圏フィールド科学センター・ 准教授

(5) 点検評価委員会委員一覧

大沼進	文学研究院・教授、 社会科学実験研究センター長
結城雅樹	文学研究院・教授
石井敬子	名古屋大学情報学研究科・教授 (外部委員)
佐々木尊	文学事務部事務長